『大和撫子』

作者　淺羽　一

母はお花見の席には決まって自慢の桜柄の着物を着てこない女だった。そして私はずっとそんな母の事を何てつまらない人なんだろうと思っていた。

若くして一回りも年上の父とお見合いで結ばれた母は、端的に言って地味な人だった。見た目が美しいとか醜いとかそう言う話じゃない。女としての意識とかお洒落に対する気遣いとかそう言う類の話だ。

例えばお花見の話にしてもそうだが、幼かった頃の私にとって母は大抵の場合、自慢になるどころか恥ずかしさを感じさせる存在でしかなかった。中でも特に、今でも忘れられないのは、父が長年の実績を認められて出世した年の暮れ、私が小学校三年生の頃のことだった。

普段から寡黙な人であった父は、幼い私にとって憧れと言うよりも恐れの対象であったが、だからこそ年末の慌ただしい時期にも関わらず珍しく上機嫌な父の帰宅はむしろ気味の悪いものだった。ましてや、娘へのお土産に苺のケーキを買って帰ってくるなんて、当時の私は喜ぶよりも先に有り得ない事なのだけれど自分が捨てられるんじゃないかなんて恐怖に駆られさえした。だけどそれ以上に信じられなかったのは、父のお土産がそれだけでなかった事だった。

狭い和室の真ん中で、彫像さながらの正座で父と相対した母は、眼前へとおもむろに差し出された包みを解いた途端、声も上げずにその場から立ち去った。

私は驚いた。あれほどまでに機敏に動く母を見たのは初めてであったし、何よりも母が礼も言わずに、いや、それどころかいっそ酷く衝撃を受けたような反応を見せたことがあまりにも私の中にあるイメージと違ったからだ。母は常に陰気とすら思えるほどに穏やかで、他者に対して卑屈とさえ感じられるほどに礼儀正しく、だからこそ父は一体どんなものを母に持ってきたのだろうかと思った。父は、出て行った母を追おうともせず、それを差し出した時と同じ姿勢のまま無言で己の贈り物を見下ろしていた。

恐いもの見たさと言うやつだった。私は、一言でも発したら一瞬で切れてしまいそうな糸で吊された橋を渡る気分で、ほんの少し、膝をずらして体を傾けた。

果たして、質の良さそうな白い和紙の隙間から覗いていたものは、真白にほんのりと赤みがかった柔らかそうな布だった。

昼白色の蛍光灯でなく、白熱電球の灯りの下では全てのものが多かれ少なかれその身を染められてしまう。けれど、それでも私がそれを理解するには十分だった。それくらい、天井からの光りを淑やかに、だけどそれでいて角度を変えれば艶めかしく反射させる絹織物は美しかった。

途端に私は苺のケーキの存在も忘れ、歓声を上げて着物へと駆け寄っていた。丁寧に畳まれた桜色の生地には、繊細な桜の花弁を縁取る刺繍が施されていた。

私は思わず手を伸ばしていた。でも、その瞬間、頭の上から声が降ってきた。「待ちなさい」と。

「それはお母さんのものだから。最初に触れるのは、お母さんにさせて上げなさい」

それは決して怒っている風な声でなく、むしろ優しいくらいに静かな声だった。でも、同時に有無を言わせぬ迫力があった。だから私は反射的に手を引っ込めて、ぎゅっと身を縮ませた。

「大丈夫よ」

と、その直後に背後から聞こえたのは、いつの間に戻ってきていたのか母の声だった。
「女の子だもの、当たり前のことよ。大丈夫、手にとってみなさい。ただし、丁寧にね」
聞き慣れたはずの母の声は、僅かに震えていて、今にして思えばきっとその瞳には何らかの余韻があったのだろう。だけど当時の私にそんなことにまで気を回すほどの頭はなく、気付けばすでにその表面へと手の平を載せていた。
こんなにも肌に心地よく滑る布があるものかと、心から驚いた事を今でも覚えている。そして同時に、本当にこれは人が着られるものであるのかとも。だって、こんなにも滑らかな生地だと、きっと肩に掛けても容易く落ちてしまうと信じられたから。
すると、そんな私の子供じみた思考を読んだのか、或いは単に父の願望であったのか、いずれにせよ父が再び声を発した。とても短く、「着てみなさい」と。
母は少しの間を置いてから、静かに「はい」と言い、やがて私の傍らに膝を突いて私へ言った。「着付け、手伝ってくれる？」。答えなんて決まっていた。
砂金を盛られた皿を運ぶ気分で、両腕で掬うように畳紙を持ち上げた私が母に続いて隣の部屋へ移ると、母は静かに「少し待ってね」と、エプロンのポケットからハンカチを取り出して畳の表面を何度か拭いた。埃やゴミなんて、部屋中に目を凝らしたって何処にも見つけられなかったのに、それでも母は二畳分の掃除を終えるまで、決して「ここに置いて」と言わなかった。私はいつしか神聖な気持ちになっていて、そっと畳に寝かせた着物を前にきっちりと正座をしていたほどだった。
母は嫁入りの際に実家から持ってきたタンスの中程から、同じように畳紙で包まれたものを幾つか取り出して着物の横に並べた。中から現れたものは、肌着や長襦袢から伊達締めまで一式、そしてやんわりと畳まれた桃色の帯だった。
「お母さん、こんなの持ってたの」
目を輝かせて問うた私に、母はにっこりと頷いて見せただけだった。母の帯は、先の着物よりも幾分か色味の濃いもので、広げる前から間違いなくあの着物に良く映えるだろうと小さな胸を躍らせてくれた。
エプロンとスカート、安物のセーターに薄いシャツ、順に脱がれていく母の服は、お世辞にも魅力的と言えなかった。それでも母はそれらを、父から貰った着物と同じくらい丁寧に畳んで脇に置いた、木壁の向こうでは雪が積もる夜の和室でとても寒かったろうにも関わらず。
私は、いつも風呂場で目にしているはずの母の体を眺めながら、だけど不思議とまるで知らない女の人の着替えを覗いているような感覚に陥っていた。母は昔から大切な日などには洋服でなく和服を着る人であったけれど、それはいつも子供の目には地味に映るものばかりで、だから私はそんな母が友達の前などに姿を現す学校の参観日などが嫌いだった。
でも、この日ばかりは違った。手早く髪をまとめ上げ、するりと襦袢を羽織り、慣れた仕草で衣紋を抜き、全く滞ることなく腰紐を締めて伊達締めを結び、もうすでにそれだけで母は見た事もないくらいに綺麗な女性に変身していた。
今にして思えば、おそらく母は私にお手伝いと言う名目で学ばせたかったのだ。残念ながら、いや、恥ずかしながら、結局、私がきちんと着付けを覚えられたのはもっとずっと後になってからであったけれど。
そうして遂に、その時が来た。ぴんと背筋を伸ばして立つ母に名前を呼ばれた私は、い

っそ神事に臨むくらい厳かな気分で畳紙を開いて、絶対に落とさないようにと思いながら桜色の着物を取り出した。それはもう、間に挟まれた薄紙ですら金箔に見えてしまいそうなほどの緊張感だった。

母は、一度だけ何かを堪えるみたいに瞳を閉じてから、深呼吸をした。そしてようやく私の手からそれを受け取った。

しゅる、しゅるり、しゅる、と私の知っていた洋服では決して聞かれないような音が耳に届き、私は声を上げるどころか息を殺していた。

と、やがて腰紐を結んで形を整えていた母が不意に言った、「背中に皺が寄っていないか、見てくれるかしら」と。正座が苦手な小学生だったくせに、この時の私は即座に立ち上がり、織られた糸の隙間を覗かんばかりに意識を集中して母の背中を見た。言うまでもなく、皺なんて一筋もなかった。でも、それでも私はさらにもうしばらく念入りに眺めてから、ようやく大丈夫だと伝えた。すると母は満足そうに「ありがとう」と言い、私はもうそれだけで大きな達成感に包まれていた。そして同時に、私は感動の吐息を漏らした。

私の目の前には満開の桜の化身さながらに美しい母が立っていた。背面の裾から前面へと舞う花弁はとても繊細でいかにも母らしい柄だった。

それから母は、最後に帯を結んだ。背中で左右に大きく開いた羽根と、その上に掛かるように微妙に長さを変えて垂らされた二重の帯。それが、角出し結びを基に工夫された結び方の一つだと私が知ったのは、もっとずっと後になってからだった。

私たちが父のいる部屋へ戻った時、結構な時間が経っていたはずであったのに、父は先ほどから一寸さえ動いていなかったみたいに姿勢を正して待っていた。「ねぇ、お母さん綺麗でしょ。綺麗でしょ」とはしゃぐ私を挟んで、座った父と立った母が向かい合った。

「どうですか」と、おずおずとその場で一回転した母が、やがてぽつりと言った。私は言うまでもなく素敵な反応があるものだと信じていた。なのに、当の父はゆっくりと頷きながらたった一言、「…うむ」。

父らしいと言えば父らしい感じがしたが、私は全くもって酷い人だと思った。どうして褒めて上げないのかと、あたかも自分が裏切られたみたいな気にすらなった。そしてまたその反感は、即座に母へも向いた。間違いなく綺麗だったのに、きっと自分だってそう思っていたはずだったのに、母はそれきり何を言う事もなく、唖然とする私を置いて再び奥の部屋へと戻ってしまった。しばらくして戻ってきた母は、数分前までの姿が嘘のように地味な普段の格好で、それを見た瞬間、私は心の底から絶望した。父を酷い男だと思った。母を惨めな女だと思った。そんな両親から生まれてきた自分を、不幸だと思った。辛うじて涙を堪えられた私だったけれど、その後で三人で食べた苺のケーキは、少しも美味しいと思えなかった。

それ以来、母がその着物を着た姿を見る事は無くなった。翌春、父の会社の関係者でも特に上の人間達とその家族が集まってお花見をする会があり、前年に出世した父が初めてそれに出席する事になった時もそうだった。

小学四年生になった私は、こんな時こそ母もきっと父から贈られたあの着物を着るものだと思っていた。と言うよりも、そう信じていた。だって、これ程までにあれを着るに相応しい場があるなんて到底思えなかったからだ。事実、他の奥さん方は、洋装が多かったものの春らしい花柄のワンピースやスカートなどを着ていて、和装の人だって帯に金の刺

繍の入ったものや鮮やかな桜の絵柄の入った着物なんかを着ていて、そんな中で地味な草色の着物に淡い茶色の帯なんて、いかにも桜の周りで見向きもされないどころかみんなの足に踏まれている芝生や地面めいて見えて、とにかく恥ずかしかった。帯の結び方こそ工夫しているのかあの日に見た形と同じだったけれど、そもそも目立たない着物や帯じゃ何の意味もないと、少なくとも幼い私は考えた。現に、父の周りの男性陣は他の奥さん方をやれ「春らしい」とかやれ「こっちの桜の方が綺麗だ」なんて褒めそやしていて、彼女たちもまた楽しそうに互いの服装を比べ合ったりしていて、なのに一人だけ緋毛氈の端っこで話題に加わる事もせず黙々と皆の料理を取り分けたり空いた盃に酒を注いでいる母の姿は、まるで単なるお手伝いさんじみて見えた。

結局、母は翌年も、またその翌年も、一度としてその花見の会にあの着物を着て行こうとしなかった。そうしている内に私も中学生になり、親と一緒のお花見なんて恥ずかしいと感じる年頃になり、と言うよりも本音は単純に女として情けない母親の姿を見ることに耐えられなくなり、また年を追うごとに父親との会話も減っていき、そうなると最早わざわざ両親の付き合いに協力しようなんて気はさらさら無くなっていた。

私はいつしか一刻も早く家を出たいと考えるようになっていた。こんな退屈な家を出て、もっと都会へ行き、そこであんな母親とは正反対の格好良い大人の女になりたいと。だからこそ、その為に勉強に励んだし、高校は無理でもせめて大学は実家から遠く離れた都会の学校へ進学したいと願っていた。実際、その甲斐もあって高校は県下でも有数の進学校へ入る事が出来た。また勿論、頭でっかちのガリ勉女なんてつまらないからお洒落にだって気を遣った。あれもこれもと洋服を買うお金なんて無かったから、お小遣いを工面して流行の服飾雑誌を買っては、それに掲載されている洋服によく似た安い服を探してきて、自分なりのお洒落を試したりした。華やかな雑誌の紙面を飾る女の子は自分と同世代にも関わらず誰もが皆きらきらとしていて、私はその差の原因は全て自らの家や両親にあるのだと思っていた。

そう、私は家族に関わる何もかもを嫌っていた。相変わらず何を考えているのか分からない父親も、そんな夫に影のごとく付き従っている母親も、少ないお小遣いも、いつまで経っても買い換えられない車も、可愛らしい彩りよりも栄養面ばかり重視されたお弁当も、全てがとにかくださくて古くさくて嫌だった。

だから高校三年生の晩夏、母がいきなり倒れて病院へ運ばれた時も、正直なところ煩わしさしか感じなかった。今年は受験で勝負の年なのに、何でまた私の邪魔をするのよ、と。

母の病名は癌だった。医師から父へと宣告された余命は三ヶ月だった。それを私へ伝えた父の顔は、さながら余命を使い果たした人のようだった。生まれて初めて、父が弱い人間に見えた。そして私は、我ながら薄情な事に、一滴の涙もこぼさなかった。

本音を言うと、私は出来る事なら母のいる病室へ行きたくなかった。正直、どう接すれば良いのか分からなかったからだ。心配よりも、気まずさの方が大きかった。

結論から言うと、母は至っていつも通りの母だった。

学校帰りの私が病室を訪れると、ベッドで横になっていた母は「良く来てくれたわね」と微笑んで、それから立ち上がりお茶を淹れようとした。「そんなの良いから寝てなさいよ、病人のくせに」。思わず冷たい言葉を発した私に、怒るどころか申し訳なさそうな笑みを浮かべて「ごめんね」と言った。「ごめんね。今はとっても大事な時期なのに」。あた

かも自分の心を読まれているみたいな気がした。
「心配しないで良いから。あなたは、あなたのやるべき事をきちんとやりなさい」
母は自分の病名や余命を知らない、当時の私はそう思っていた。だからこそそんな事を言えるんだと思っていた。病室で母と接するたびに、本当の事も知らないで何て気楽な人間なんだと無性に苛々した。何も知らなかったのは己の方だと知ったのは、母が亡くなって二年もしてからだった。
元より太い人でなかった母は、日に日にさらに細くなっていき、そのせいなのか体の色素まで薄まっているようだった。だけど、それにも関わらず、私がいつ病室を訪れたとしても母はちゃんと起きていて、「風邪引いてない？」とか「ご飯はちゃんと食べてる？」とか「冬物は押入の下の奥にあるから」とかそんな事ばかり言ってきて、最後には決まって「ごめんね」と謝った。「何で謝るのよ」と言ってしまう私に、「大事な時期なのに、迷惑掛けてごめんね」と寂しそうに微笑んで言った。季節はすでに秋を終えて冬を迎えようとしていた。私は医者の言う事なんて案外当てにならないものだと思っていただけだったが、後から父に聞いた話によると、母は何としてでも冬が終わるまでは生きていようと決意していたそうだ。そんなのせめて春まで頑張れば良かったのにと言う私に、父は「冬が終わるまでと言うのは、要するにお前がきちんと大学受験を終えられるまではと言う意味だ」と言ってきて、私はやっぱり「…それなら入学式が済むまででも良かったじゃない」と返す事しか出来なかった。
しかしながら、真実がどうであれ、確かに母は、そしてまた父も、私が気付いていなかっただけで、私の生活や受験を最優先に考えてくれていた。おそらく、いや、間違いなく、幸いにして病気らしい病気を経験した事のない私には想像も付かないほど苦しかったはずなのに、そんな素振りはおくびにも出さず、病室を移っても、転院する事になっても、母はただ普段通りの様子で「風邪引いてない？」とか「ご飯はちゃんと食べてる？」とか「迷惑ばかり掛けてごめんね。でも、あなたならきっと大丈夫」とか…。
私は、甘く考えていた。いや、ただ単に甘えていた。
だから、あの日、共通一次試験の初日を五日後に控えた日の夜、母が突然に我が儘を言い出した時、私はつい面倒だなと考えてしまった。病院からの電話によると、母がどうしても着物を持ってきて欲しいと言って聞かないと言うのだ。それも、今日でなければ、今夜でなければ意味がないと。
果たして、父の決断は早かった。
「今すぐお母さんの着物を用意しなさい。準備が出来次第、病院へ行くから」
母が家を離れて以降、まるで気の抜けたようだった父の声は、しかしその瞬間だけは紛れもなくかつてのもので、私は逆らう間もなく条件反射的に動いていた。母の言葉が指す着物や帯が一体どれであるのか、看護婦も父も具体的に言わなかったのに、私は自然とそれらを選んでいた。一式を抱えた私が外に出ると、父はもうすでに車のエンジンを掛けて待っていた。
私の住んでいた地域の冬は厳しく、あの日も外には前日に降った雪がしっかりと積もっていて、タイヤ-チェーンが勢いよく道路を削る音はさながら父の叫び声のようでもあった。私は目を開けている事が恐くて、必死で胸の着物を抱き締めていた。
病院へ着くとすぐに看護婦達が迎えてくれて、私たちは車のエンジンを切るのもそこそ

こに母の病室へと向かった。扉を開けると、そこには顔にうっすらと化粧を施してベッドの縁に腰掛けた母がいた。

何言か、母が言おうとした、意を決した風に。けれど、それよりも先に父が「良い」と言った。たったそれだけで母は言葉を呑み込み、それから私を見た。微笑んでいた。

「着付け、手伝ってくれる？」

どうしてか私は自分でも理由が分からないけれど泣きそうになっていて、黙って頷くのが精一杯だった。「ありがとう」と言う母の方を極力見ないようにした。看護婦も室内に残ってくれようとしたが、私は首を横に振ってそれに応えた。

そして私は、狭い個室の床の上に抱えていた着物などを置く、その前に、いったんそれらをベッドの上に置いて、傍にあったタオルでそこを何度も拭いた。意識せずともいつか見た母の姿が浮かんできて、自分の姿をそれに重ねた。やがてこのまま舐めても平気だと思えるくらいに拭いてから、ようやく立ち上がった時、ベッドの縁で母はとても穏やかな表情をしていた。治療のせいでずいぶんと少なくなっていた髪は、いつの間にか綺麗にまとめ上げられていた。

「それじゃあ、まずは―」

「分かってる」

母の言葉を遮り、私は一つ目の包みを開いた。着付けを自分一人でしたことなんて一度もない。浴衣でさえ母に任せていた。でも、あの日だけはちゃんと、本当の意味で母の手伝いとして働きたかった。またそうでなければならないとも思った。

入院着の薄いパジャマを脱がし、自分の肩で母の体を持ち上げるように立たせた。母の腕や足は枯れ木のように細く、体に回した腕には洗濯板のごとき肋骨の感触が伝わってきた。本当に、こんな人間が自分の体を支えられるのかと不安になった。でも、母はふらつきつつもちゃんと自らの足で立った。青白い蛍光灯の下で母の肌は余計に透けて見え、白い肌着のみの姿は嫌になるくらい印象的だった。私は無理矢理にその映像を意識から追い出した。でも、そんな苦労はすぐに必要なくなった。

長襦袢を羽織った途端、確かに辛そうに丸まっていた母の背筋が伸びた。左右の襟先を正面で合わせる姿は凛々しく、やがて滑らかに衣紋を抜く動作は優雅だった。あれほど偉そうな考えを抱いていたくせに、私にはもう母の邪魔をしないようにするので一杯だった。伊達締めを結んだ母が、気持ちを整えるように深呼吸をした。私は畳紙を開いて、美しい桜色を掬い上げた。

やはり、改めて見ても綺麗な着物だと思った、とても素直に、一切の誇張無く。そして何より、それを誰よりも相応しく着られる母を羨ましく思った。私はようやく、それまでずっと抱いていた母に対する考えが間違いであったのかも知れないと悟った。寒々しい病室にいながら艶っぽい音を立てて季節を先取る女の色香は、自分には到底表現しようのないものだった。

「背中に皺が寄ってないかしら」

母の言葉に、気を抜いたらぼやけそうになる視界を何とか整えてその背中を見た。勿論、皺なんて一筋もない。そう告げると、肩越しに母がこちらへ微笑んできた。「ありがとう」と。その瞬間、薄い緑のリノリウムの上に、淡い桜の花が咲いた。

最後の帯の結び方も、やはり決まっていた。「これはね、『しだれ桜』と言う結び方なの

よ」。ある程度の力を使う帯結びはさすがに難しいのか、これを結んで、これをねじり上げてと、自分のせいで形を崩してはいけないと緊張する私に指示を出しながら語る母の声は、嬉しそうで、誇らしそうで、つまりそれこそが母にとっての美意識であったのだと理解した。この人はただ夫に付き従っていたのでなく、夫を引き立てていたのだ。そしてまたこの人はただ美しい景色の中で埋没していたのでなく、景色の美しさに最も適した形で己を調和させていたのだ。だとすれば、ある意味それはとてつもなく自分に自信のある証拠ではないだろうか。

「…お母さんって、綺麗だったんだね」

ともすればきわめて失礼な発言だった。にも関わらず、母は至って平然と「あら、ありがとう」。

あぁ、敵わないなと悟った。同時に、出来るならこの人の全てを一から教えて貰いたいと思った。どうしてもっと早く気付けなかったのかと、それが何より悔しかった。

「お父さんを、呼んでくれるかしら」

母の言葉に頷いて病室の扉を開けると、そこには案の定、直立不動の姿勢で待っている父がいた。

「お母さんが、入って良いって」

私は父を手招いた。

「…お父さん？」

けれど、父はすぐに動こうとしなかった。間違いなく待ちきれない想いで立っていたはずなのに、それなのに難しい顔をして、一向に足を持ち上げようとしなかった。

私は再び呼び掛けようとした。でも、それより早く私のすぐ後ろで声がした。

「あなた、どうですか」

驚いて振り返れば、そこには母が柔らかい笑みを浮かべて立っていた。私は、本来であれば病人を支えるべきであったかも知れないが、気付けば自然と母に道を譲っていた。父の息を呑む音が聞こえた。

「あなた、どうですか」

もう一度、母が同じ問いかけをした。

しばらくの沈黙が流れた。時間にして、私の肺が二度の往復を済ませるくらいか。

果たして、ややあって父の見せた反応は「…うむ」、そしてさらに一拍開けてから、「とても良く、似合っている」。

私はきっと、この瞬間の光景を生涯忘れる事がないだろう。さながら大好きな女子を前にして身動きが取れなくなっている男子のごとき父と、何ら普段と変わらない様子で微笑みを浮かべている母。それこそ、私が理想として描く大人の女そのものだった。

「あなた、少し散歩をしませんか」。最早、私や父が母に逆らえるはずもなかった。

私が看護婦から借りてきた車椅子に母が乗り、父がそれを押した。最初こそ心配そうだった医師や看護婦も、母の姿を見た途端に感動した面持ちになり、やがて少しの間だけならと許可を出してくれた。そして父はゆっくりと、母の車椅子を押して病院の中庭へ向かった。私は二人に付いていく代わりに、自分の着ていたコートを母の膝の上に掛けてあげた。こちらを見上げて「ありがとう」と言った母の顔は、少女みたいだった。

消灯時間を過ぎた玄関の窓から、外の景色はよく見えた。中庭の木々を染める雪は純白

と言うよりもうっすら青みがかっていて、雲一つ無い紺色の空に合ったものは真昼の太陽をそのまま氷漬けにしたようなまん丸のお月様だけだった。そしてそんな中で、桜の着物を纏った母が父と一緒に並んでいた。

まさしく銀幕の向こう側を眺めているようだった。それくらい完成されて見えた。音声など無くとも二人の想いがひしひしと伝わってきた。こんなにも心地よく頬を伝う涙があるのだと生まれて初めて知った。

あれが私の母なんだと、不意に声を大にして言いたくなった。今すぐ寝静まった病院中の人間を叩き起こして、あの光景を見せつけてやりたくなった。

でも、それはやっぱり不粋の極みに違いないから。だから私はその代わり、声には出さずこう誓った。それはつまり、あの人のような大人に、あの人のような女に、そしてあの人のような母になろうと。

やがて自分達が作った轍を辿るように二人が戻ってくるまで、私は一歩も動かずにその姿を見つめていた。

本当に、ありがとう。最期にそんな言葉を残して母が静かに息を引き取ったのは、病院の桜が満開になる少し前の事だった。

単なる専業主婦の葬儀とは思えないほど多くの弔問客に囲まれる中、生まれて初めてともに見た母の寝顔は、とても美しいものだった。

〈了〉